



中高生とともに差別と闘う

『平行線で手をつなぐ』

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



高校一年S「個性について」

最後の人権を語り合う中学生交流集会。講演会一人目のパネリスト、高校二年生Aの「献血について」。それに続く二人目は、高校一年生のSです。内容は、「個性について」。

小中学生のころ、個性と言えば、スポーツが得意だとか、楽器演奏が上手だとか、プラスな面にばかり注目しがちだったと言います。その一方で、自分が劣等感を感じるマイナスな面もあったと。でも、卒業を控えて感じたことは、共に活動してきた仲間のやさしさや仲間との絆、得られたよろこび。つまり自分の個性とは、その人を形成するすべてではないかと言うのです。表面的な見えやすいものだけじゃなく、内面的な見えづらいものも個性だということに気づいたと。とするならば、マイナス的な意味合いの犯罪も個性となるし、そこから更正することすらも個性と言えるのではないかと。犯した行動が悪いことであることは前提としたうえで、そこから立ち直ろうとする行為も、見えにくい個性として尊重しなければならぬのではないかと。そもそも命があり、生きていくということ自体すごいことではないか、ということこそ、実体験を交えながら話してくれました。

高校一年生でこんなことを考えていること自体、すごいなと思いました。少なくとも私はそんなことを考えていませんでした。

ここで彼女は「更正」と言い、

死刑制度についてはふれなかったのですが、私から敢えて日本の死刑制度について突っ込みを入れました。すると彼女は、「だから死刑制度はなくなった方がいいとは私は思っています。いろいろ方法はあるんじゃないかなとは思っています」と返したのです。

死刑制度を考える

この意見に猛然と噛みついた高校生がいました。概略だけにしますが、Sの親友Hです。

「別にSさんとバトる気はないんですけど、私、死刑制度について、あってもいいんじゃないかって思っています。結構、被害者のことを考えたりするんです。被害者の家族からしたらたまったもんじやないなって思うんです。人が殺したら犯罪者になっちゃう。けど国が殺したらそうじゃない。だって自分の娘が殺されたのに、自分が殺して犯罪者になるよりは国が命を奪ってくれた方が、復讐とまではいかないけど、まだちょっと自分のなかで心の区切りになるんじゃないかなって。それこそ狭山事件みたいに冤罪事件が生まれちゃうから、死刑制度とかあってはいけないんだろなとは思って、亡くなっちゃった被害者の家族からしたら、自分が復讐するわけにもいかないし。だったら国にやつてもらうしかないんじゃないかなって思うんです。死刑制度は廃止すべきだ。死刑制度がある国は今や少なくなってきたって言われても、これでは被害者は浮かば

れないだろうなって。死刑制度は良くないぞっていう意見聞いても、自分のなかでは、死刑制度はあった方が、被害者の家族のためにもいいんだろなって思っちゃうんです。喧嘩売ってるつもりはない。そんなつもりはまったくないんだけど。更正が大事みたいなのを聞いて、それは本当に確かにそう。更正することによって、「自分が間違っていました。次からはこんなことはしません。みなさんもこんなことはやめましょう」とみたいな。これはいけないことなんだって広めるのも大事だと思うけど、私はやっぱり被害者に寄り添うべきじゃないのかなって思います。以上です」

これにSが返します。

「どんなに悪い犯罪者でも、どんな殺人鬼でも、どんな人でも必ず人権であると思うんですよ。どんな人間であっても。人の命を奪うって、とんでもなく悪いことであるのは分かっています。Hさんの言うことも、もちろんすごくよく分かるんです。被害者が浮かばれないとか、被害者の気持ちを考えると、死刑制度っていうのは理解できるんですけど。これに関しては私とHさんの考え方が違うのかなって思っています。逆に例えば、無期懲役とか、生きてるけど別に何もできない。ただ刑務所にいるだけっていう状態じゃないですか。生きて償ってほしいと私は思うんですね。もし家族とかの命が奪われてしまったら。でもそれをHさんは、死んで償ってほしいって思っ

てるっていうわけだから、たぶんこの話は平行線になるんじゃないかなと思います。実際平行線になってる話でもありますし。やっぱり命にかかわることなので、なかなか死刑制度はなくなるんじゃないかなって思っています。私は犯罪者の人権も大切にすべきだと思います。以上です」

平行線で手をつなぐ

聞きながら、こんな対話がどの学校でもできたなら、と思います。結論を望んでいるのではありません。当事者や当事者にかかわってきた方々、多くの研究者が議論を積み重ねて出している結論ですから、そう簡単に高校生が結論を出せるとは思いません。しかし、考えること、対立することであっても、それを互いに述べ合うことは大切なことだと思うのです。

ずいぶん昔のことですが、意見が折り合わず、平行線にっちもさっちもいかなかった人権学習がありました。テーマは、「部落問題学習は必要か」です。自分が授業者なら、パニックになり途方に暮れたらどうと思います。しかし、そのとき子どもたちは、自分たちでその難局を見事に収束させたのです。昨年いただいた部落解放文学賞の小説部門受賞作「おかえり」に、その一部を引用しました。次号にその一節を紹介しました。それは作り話ではなく、実際にあった出来事です。

(つづく)